

【佳作】

思いを綴る

大家 衣穂理（奈良県 奈良県立青翔中学校 3年生）

いつからか、まず一番後ろのページから本を読むようになっていた。そこには大抵、その本の著者のプロフィールや顔写真が載っていて、これから読み始める本のイメージが、ふんわりと掴める気がするからだ。でも、この本はそうする必要がなかった。なぜなら、著者本人から贈ってもらった本だからだ。昨年、私が書いたエッセイに、思いがけず大きな賞をいただいた。そのことを数社の新聞が取り上げ、記事にしてくださいました。普通の中学生である私が、新聞の取材を受けるなんてもちろん慣れていないし、あがり症の性格も災いして、不安でいっぱいだった。そんな私の前に現れたのが、この本の著者であり、新聞記者の宮崎亮さんだった。しゃべるのが苦手な私の心を解きほぐすような宮崎さんの話し方に、普段考えられないような、笑顔でしゃべりながら私がいちきつと宮崎さんが言葉を選んで、私の心に寄り添いながら、話を進めてくれたからだと思った。私は宮崎さんの「言葉」の魔法にばかり、取材の一時間はあつという間に過ぎた。とても楽しいひとときだった。帰り際に、宮崎さんから、この本をいただきたい。「よかったら読んでね。」と手渡ししてくださいましたときの宮崎さんの笑顔が印象に残っている。

帰りの電車で私は早速この本を読み始めた。いつもとは違い、初めのページ目から。「生活綴方」という聞いたことのない作文教育。それは大阪府の堺市立安井小学校で行われている十二年間続く授業である。定年後もその学校に残り、今は講師をしておられる勝村謙司先生が宮崎さんと共著なさっている。全学年の児童が月に一度、自由に作文を書き、クラスごとに文集を作る。そしてその中からいくつかを選び、クラス全員で読み合う。文章のうまい下手を批評し合うわけではなく、書いた子の気持ちになつて考えてみたり、自分ならどうするかなど、想像力や思いやりの心を育むことがねらいだと書かれていた。

数々の作文の中で、私が最も心を動かされたのは、当時六年生のマナトが書いた「自分の好きな英会話」という作文である。マナトのお母さんは女手一つで双子の子どもを育てていたが、二人が四年の春に亡くなった。双子の妹は重い病気を抱えている。そんなマナトの作文には、亡くなったお母さんが好きだった海外旅行に、いつか妹の病気が治ったら一緒にいきたいという、優しい願いが込められている。どうしてもこの作文が頭から離れなかつた。私もマナトと同じ「双子」で、自分と重ね合わせていたからだろうか。あるいは、私の母も病気がちだからだろうか。母は普段は元氣そうにしているが、ふと弱気になったときに、「生まれできてくれてありがとう。」と独り言なのか私に言っているのかわからないほどの声でつぶやくことがある。私は、「うん。」と軽く流すように返事する。どういたしましては母に対してえらそうな気がするし、無言でいてはせっかくの母の言葉と気持ちが消えてしまうような気がしたからだ。命というさだめがある限り、ずっと一緒にいたいという願いがかなえられることは難しい。本当はマナトは、お母さんと妹と祖父母とで行きたかったのだ。もうそ

の願いは現実にはならない。作文の中の「自分が、英会話が好きな理由は、母の影響です。」という一文にマナトの、お母さんへの思いがあふれている。マナトは「お母さんが亡くなったことを作文でみんなに言えたから、なんでも話せる親友、先生ができたんだと思う」と行っていたのだそうだ。「言葉」の力、「作文」の力はとても強くて、とても優しいと、心から感じた。

私にも今、綴っておきたい思いがある。私は何年前か前、父と母、そして姉に、何度も「双子になんて生まれたくなかった」と、言い放った。反抗期だったせいでもある。いつも姉と比較されたり、「双子のシンクローやってみてよ。」などと、双子を面白おかしく扱われるのが嫌だった。姉ともしょっちゅう双子特有のもめごとでいさかいを起こし、双子である自分が嫌だった。しかし姉も私も成長し、共通の趣味を持つようになった。趣味のことを二人で話しているとき、「試験勉強を二人で教え合い、励ましながら頑張っているとき、「双子も悪くないな。」と思えるようになってきた。そんな思いの変化を綴っていきたいのだ。まだ思いの途中であることと、恥ずかしさもあり、家族に読んでもらうのは、しばらく先になりそうだ。でも、綴ることで、私が双子である私自身の存在と意味を認めることができるようになったら、家族に読んでほしいと思っている。

そして、私が成長していく中で双子の私を誇れる小さなカケラを見つけたとき、まだ応えられていない母の言葉に、「生んでくれてありがとう。」という言葉を返せるような気がしている。その日は必ず来ると信じている。

書名…こころの作文

著者…宮崎 亮・勝村 謙司